

日本の獣医学と畜産業



(社)日本獣医学会 理事長
佐々木 伸雄

この数年、いくつかのアジアの国を訪問する機会があり、それぞれの地域で大学の獣医系教員、地域の獣医師等と大学における獣医学教育について話す機会があった。その中で感じた点は、それぞれの国ではその国の事情を反映した獣医学教育がなされていることである。例えば多くの東南アジア諸国では、かつての日本のように畜産業をどのように発展させるかが獣医学の大きなテーマであり、学生も自分の将来像をそこでの活躍に向けている。タイではエビの養殖に関与したいという希望の学生もおり、またマレーシアでは、豚、鶏の獣医学を積極的に学びたいという学生がかなり多かった。これらの主体は、疾病予防であり、いかに感染症、寄生虫病を撲滅するか、が大きなテーマである。一方、中国では、地域によるとは思われるが、畜産業の進展に伴って日本と同様、第四胃変位や乳房炎、蹄病などが増加しており、これらに対する個体診療が注目されていた。中国では、将来小動物の臨床に進みたい学生が若干増加傾向にあるとのことであったが、犬の登録料が日本よりもかなり高い現状では、北京や上海等の大都市を除き、まだ小動物の獣医療が発展するのには時間がかかるのかもしれない。台湾や韓国ではほぼ日本と同様の状況で、小動物の臨床を目指す学生が増加しているそうである。

日本では毎年1,000人の学生が卒業するが、小動物臨床への関心は急速に高まっており、現在その40-50%は小動物臨床に進む。犬や猫を飼育する家庭が増加している現在、この傾向は当分続くと思われる。またこの分野も今後さらに発展し、細分化されるものと思われる。このような獣医療の細分化、高度化は学生にとっても非常に興味深いところであり、また、社会のニーズを反映するものである。

一方、我が国においては牛を中心とする産業動物臨床も大きな変革を遂げている。上述した疾病予防や個体診療は依然として大きな分野ではあるが、生産獣医療と呼ばれる、畜産経営も視野に入れた、子畜の疾病予防やワクチンプログラム、繁殖、栄養、畜産環境管理等、多くの分野を組み入れた群管理に視点が移行しつつある。これは現在の畜産農家の要求にあわせた変化であり、世界的にもこの潮流が進行している。

このような背景に対応して、日本の獣医学教育は真に社会の要求を満たしているであろうか。小動物臨床に関してはおそらく遅々としてはいるものの、その方向に進んでいるように思う。しかし、産業動物獣医学に関しては明らかに「否」である。その最大の理由は、獣医学教育の規模があまりにも小さい点である。また、大学評価は依然として論文至上主義であり、フィールドを使わない、より実績のあがる研究に若手獣医学教員は目を向けがちである。さらに獣医学の高度化、細分化にあわせた改善ができず、東大も含め、多くの臨床教官は日々集中する小動物の診療に追まわられている。現在、卒業生のうち、産業動物臨床分野への就職を希望する学生は全体の5-10%程度と少ないが、といってその分野の教育を減らしてよいことにはならない。

その解決策はあるのだろうか。獣医学系大学は再編整備によって教員の増数をはかり、教育充実の実現を試みてきたが、今のところ様々な壁に突き当たっている現状である。この運動は今後も続けなければならないが、社会の要求には待ったはない。とすれば、多くの関連分野が協力して、社会のニーズに合わせた教育・研究活動を行う以外に方法はない。獣医学、畜産学はもともとそのフィールドを共有しており、また他にも多くの学問分野が共有している。我々は再度実学の原点に戻り、社会のニーズは何かを真剣に検討し、お互いの協力体制を構築する必要がある。もちろん、従来からそのような協力は個人レベルでなされている。今後はこれらを大学レベル、学会レベルに広げ、日本全体で協力体制を整備することがもっとも重要な課題ではないかと感じている。日本獣医学会としてもこの方向に向かって積極的に努力する方針である。

本誌の趣旨にはあわない巻頭言になってしまった気もするが、畜産業を取り巻く環境を考えると、どこからかこのような連携運動を活性化させることが緊急の問題ではないかと考え、ここに述べさせていただいた。